NPO法人 JSRC

2011年 5月10日

第10号

Jomon Shiba

特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第 10号

もくじ

大震災と原発事故と老人と犬
☆JSRC 理事長・新美治一(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員) …… 2

お知らせ　総会・交流会の延期 …… 2

シバの散歩道(10)　☆JSRC理事・根深　誠(文筆家・釣り師・元登山家) …… 4

ケンタを思う　☆埼玉県　山下楠一 …… 9

お便りコーナー　☆神奈川県・市野さん　☆東京都・中山さん …… 11
☆富山県・竹内さん　☆群馬県・桒原さん　☆東京都・竹内さん …… 12
☆千葉県・藤崎さん　☆秋田県・石井さん …… 13
☆北海道・越田さん …… 14

思い出の犬たち-10-「桜」を生きた犬-(3)　☆柴犬研究所 …… 16

根深 誠・藤井忠志対談講演会「白神山地が世界遺産に指定されるまで」
☆本州産クマゲラ研究会編 …… 18

事務所報告　☆会費　☆新入会　☆寄付金　☆仔犬登録　☆犬舎登録 …… 22
☆寄贈　☆編集より …… 22
☆諸料金一覧・血統登録について …… 10

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人　縄文柴犬研究センター

会事務所　**郵便振替口座**　02280-2-106951
〒　014-0073　**秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5**　TEL　0187-68-2976
http://www.jomon-shiba.com/　encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

大震災と原発事故と老人と犬

NPO法人 縄文柴犬研究センター 理事長 新 美 治 一
（名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員）

三陸の幾つもの海岸を完全に飲み込んだ「津波」の恐ろしさには、言葉がない。地震の結果、土地が陥没した地域の復興への道筋は、素人の私には、わからない。土地が海面下に落込んだ領域の復興はほぼ絶望的と言われるが、そうではない領域が「地域共同体」として蘇ることの可能性はどうなのか？自然の持つ、圧倒的な力に従いながら、生きていくすべを模索せざるを得ない。人々は、このような試練をのり越えて、現在があるのだと、自分に言い聞かせるほかない。

しかし、福島第一原発の事故は、「自然に対する侮り」から生まれた人災であり、この人災は、資本の論理に屈服した人々がもたらしたものである。そして、原発が機能不全に陥ったあと、この人災を取り返しのつかない未曾有の原発事故にしたのは、やはり、東京電力という資本の力に屈服し、かれらの意を受けて、「原発事故」を扱った人々である。このなかには、当然に現政府の責任者が含まれる。

福島大学に在職していた頃、福島県国家公務員労働組合連合会の会長の職を数年間引受けたことがある。そのときの「最大の課題」の一つが、「福島原発の安全性」を問い、人が「原子力」を完全に制御できる段階まで、「運転を中止させ」・「原発の新設をさせないこと」を実現することであった。東京電力・政府・県の壁は厚く、びくともしない程、強固であった。それほどに壁はわれわれの前に厳然と立ちはだかっていた。しかし、ひるむわけにはいかなかった。前任者から引継ぎ、私も私の後任者も、常にこの「要求」を掲げ運動を組織してきた。壁が動いた、と思われる時期があった。それは、自民党所属の「佐藤栄佐久知事」が、地域の人々の突き上げによって、福島原子力発電所の安全性に疑義を呈し、「運転の再開」に慎重な態度をとったときである。彼は、また、プルトニュームを排出する危険性が高いプルサーマル型原子炉の「発電施設」の認可に慎重な態度を表明していた。次の選挙で、仔細な「不祥事」を理由に知事に立候補できず、替わって、プルサーマル型原子炉の「発電施設」の安全に問題はない、と主張する「現佐藤雄平福島県知事」に席を奪われることになったのである。

3月11日の大地震の後、NHKを含む主要なメディアは、東京電力と政府関係機関の発表する「情報」を伝達するのみで、この原発事故の「真の恐ろしさ」を報道することはなかった。東京電力を擁護する姿勢が透けて見えたのである。小生のような素人でも、大津波の後、冷却装置が機能しなくなった福島第一原発の第１号発電施設から第四発電施設までを、「廃炉」にする決定を直ちに下し、その措置をとっていれば、プルトニュームを含む放射性物資の現在のような飛散・拡散を防ぐことは出来た、と判断できる。東電のこれら４基の原子炉を「再生」させたい、との意向に従い、処理をしてきたことが現在の事態を招いているのである。ここでも、資本の論理が最優先されていたことは、誰の目にも明らかである。

1997.4.1写

1997.5.28写

結果として、自然豊かであった福島の浜通り地域は、「人も動物も植物も、命あるすべて」が住むことの出来ない第２の「チェルノーブイリ」になりつつある。そして、それは福島の全域に拡大しつつある。政府の指導のもとで福島県及び福島県農協連合会は、2011年春の作付けに係るあらゆる「農作業」をするな、との指示を出している。田畑を耕すと放射線汚染物資が拡大・飛散するからとの理由である。

小生は、あと1年で退職する。原発事故以前は、五味さん夫婦が訪問してくれた椚林のなかにある山小屋で、「晴耕雨読」の生活を計画していたのであるが、これが出来なくなってしまった。農作業はするな、湧き水は危険だ、等の行政指導には従わざるを得ない。津波の被害を蒙った人々とは比較にもならないが、これで、老人の夢は、はかなく消えたことになる。

我が家の「縄文犬」は、機会あるごとに、天をつくような高さのこの椚林のなかを自由自在に走り回り、育ち生きてきた。喉を潤すための清流があり、かれらの絶好の水呑場であった。冬になれば、薪ストーブの脇に寝そべって寝息をたてていた。かれらにとって、落ち葉が何十年と堆積されて「熟成した土」の匂いは、格別であったにちがいない。我が家の犬たちにとっても、原発の事故は、「他犬〔人〕事」ではなく、自らの癒しの生活圏を奪われる深刻なことになったのである。

私たちが、命をまっとうするために、その日の糧を稼げば何とかなる、という時代は、終ったようである。津波がありとあらゆる現存する財物と命を個人から奪い去ってしまった。これから先、被災地の人々には、想像もつかないような生活が待ち受けているであろう。この現実と比較すること自体が意味のないことであるが、原発の事故は、農業・漁業・林業で生きてきた福島の人々のこれから先の生き方を奪ってしまった。加えて、何世代にもわたって、「命のまともな継承」を阻むことになりかねない。福島の縄文柴犬も同じ運命を味わうことになる。

この時代を、どのように生き抜くか？！老人であるとはいえ、考え行動せざるを得なくなった。東北関東大震災のもたらした「マイナス」は、想像も出来ないほど甚大である。福島原発の「マイナス」はこれとは異なり、凡その見当はつく。放射能で汚染された大地と海では、半永久的に生きていくことは出来ない。東電と歴代の自民党・公明党の政府及び現民主党政府に責任をとってもらわなくてはならない。責任を取らせる行動が国民に求められている。そして、日本全国の津々浦々にある原発の再点検とその結果に基づく「運転の停止」、非常事態が生じたときの対応策、新規の原発の建設はしない施策、を政府と電力各社にもとめていかなければならない。老人も安閑として過ごせる時代ではなくなった。犬たちも、ご主人と一緒にもうひとふんばりしなくてはならない。何千年と命をつないできた縄文柴犬が、初めて遭遇する事態である。時代は、劇的に変わったのである。老人と犬がスクラムを組んで、命をながらえ、命を継承して行くために「がんばらざるを得ない時代」になったのである。原発の稼動・新設はこれを許さない、との決意を改めて思う日々である。（2011.03.28）

お 知 ら せ

この度の大震災で、被災された会員の方々、ご家族、親戚の皆さまに心からお見舞い申し上げます。

総会・交流会の延期について

この度の東北・関東大震災による影響を考慮し、4月16・17日に予定した総会・理事会・審査部会は、急遽延期とし、有志による交流会についても中止と致しました。後日、改めて開催する予定をご案内致します。

当法人としては、被災地の皆さまの1日も早い復旧を最優先するためのご協力をさせていただきます。

2011.3.29　NPO法人　縄文柴犬研究センター　理事長　新 美 治 一

シバの散歩道 (10)

根深　誠（文筆家・釣り師・元登山家）

十一月も末になり、近郊の山々では、広葉樹がすっかり葉を落としていた。山々は灰色がかって沈んだ感じに見える。このころになると毎年、深く澄み切った紺碧の空がひろがる。それが三日ほど続いていたので、いまを逃すと今年は好天気がもはや望めないかもしれない、そういう思いで、かねてから予定していた久渡寺山のハイキングにシバを連れて出かけた。

おりしも日曜日である。土淵川沿いのサイクリングロードでは、小学生の一行が先生に引率されて、わいわいガヤガヤ騒ぎながら歩いていた。野外観察でもしているのだろうか。と思いきや、先生が号令をかけたわけでもないのに、歓声を上げて一斉に走り出した。陽気に浮かれて、駆け出したくなったのだろうか。はつらつとした元気が私にも伝わってくるようだ。広々とした田園風景の中で、じつにのびやかである。

野外に出たこうした機会に、犬猫看板やゴルフの打球がネットを越えて飛んでくることの危険性について現場検証しながら、みんなで地域社会の実態を考える習慣を養えば、きっと社会はよりよい方向へ発展するのではないかと思われる。小学生諸君、弘前市役所の看板内容のうそ臭ささを見抜いてもらいたい。そのことを先生に言うのも、まことにでしゃばったことなので黙っていたけれど、聞くと、子どもらは近くにある桜ケ丘小学校の生徒たちだ。

「おお、元気がいいな」と私が言うと、「ちなみに私たちは桜ケ丘小学校です」と、ハキハキした答えが返ってきたのだった。シバを見かけたことのある生徒もいるらしく親しそうに走り寄ってくる。シバも尻尾をふりふり、前足を上げてはしゃいで愛嬌を振りまく。

それにしても小春日和ののどかな晴天にめぐまれ、秋の里山ハイキングには打ってつけである。風景は光り輝いていた。稲刈りの済んだ田圃や収穫を終えたリンゴ畑の向こうに、新雪をまぶして裾野を広げた岩木山が見える。そして反対方向には、津軽平野の尽きるところに連なる、山頂をいくつもこぶのように横並びにした八甲田の山並。雪がなく、晩秋の枯れ草色に山頂部が染まっている。山があって川が流れて平野がひろがり、その平野の川沿いや山際に田園が開け、町並がある。自然にはめぐまれた土地柄でありながら、大多数の人たちはその事実を自覚してはいないし、社会のあり様を周囲の自然との関連でとらえようとはしていないようである。

シバの散歩コースにかぎっていえば、三面を護岸された土淵川の流れを、ところどころでもいいからアスファルトを剥ぎ取るなりして窒息状態から開放すれば、それと関連する周辺の自然は甦ることだろう。甦った自然の息吹と共存する日々の生活が成り立つならば、自然との交感が保障されるわけであり、ここでは人心もまた蘇生し、活性化するにちがいない。逆に、自然との交感が疎遠になれば生命に対する感性もまた希薄になることだろう。というような考え方が私を支配している。

これは生活環境としての自然が影響を及ぼす人情の機微にかかわる問題である。こうした観点からすれば、周囲の地勢を生かした里山田園構想が地域社会の政治課題でもあるはずなのに、犬猫看板に伴う市民間のトラブルや動物の変死事件、ゴルフの打球がネットを飛び越えてくる危険性などを放置している弘前市役所の対応を見てわかるように、いまのところ行政の姿勢として、そうした方向には向かっていないようだ。これでは管轄する地域社会に対する責任を自覚していないように思えてならない。事実、この一年の間にも市職員による汚職が連発したり、市議にしても一期四年間で一度も質問しないのが複数いるのだから推して知るべしである。

私たちが暮らすこの地域社会は目下のところ、自浄機能を欠いている、だらけている、としか言いようがないのではないか。私は柄にもなく一市民の良識として改善を願い、犬猫看板やゴルフの打球の問題について町内会や交番、そして市役所に意見を述べきたのだが、受け入れられなかった。改めて触れることにするけれど、市役所の一貫した不誠実な対応の背景には根深いものがある。市民もまた黙認して従属しているのであり、だからこそ私の公開質問状の回答に見られるような高飛車な態度が成り立つのである。これは差別・抑圧であり強権支配の類ではないだろうか。私はそう感じ取っている。だから茶化して「封建領主と農奴」だとか「部族社会の酋長」などと公言し、テキの敵意の的になったりするのだ。

官尊民卑の歴史的風土からいっても地域社会に隔絶された人たちは、例えが悪いかもしれないが、陸封されたイワナのように共食いを繰り返し、異物に対して拒否反応を示すのは理の当然というべきだろう。こうした人たちの心理的性質としてボス、すなわち領主や酋長がいなくなると統率がとれなくなる。その一方で、ボスを上回るような外圧には、志が低いだけにメチャメチャ弱い。民主的思考様式の価値判断からすれば、トップダウン（上意下

駆け寄ってくる小学生たちにシバは愛嬌を振りまく。

達）で現状の社会風土に胡坐をかくのではなくボトムアップ（下意上達）を促すための、口先だけでない実効性のある啓蒙啓発に励むべきではないだろうか。

それはさておき、住みよい地域社会にテーマを設定し、さまざまな問題を解決しようとした場合、それを阻む要因は、今年が築城400年だからといって3億円の予算をつけて市役所が音頭を取り、単にお祭り騒ぎをする体質と近いところにあるような気がする。

もちろん、節目としての式典を否定するものではない。誤解を招かぬように。人生に例えれば誕生日のようなものだろうから祝福すべきことではあるが、それと並行して百年の計、つまり未来へ向かってのビジョンを立て、地域再生に取り組む必要性もあるのではないか。そのためには環境整備として、さっそく犬猫看板やゴルフの打球の問題などは解決しなければならない。なにしろ私の脳味噌ときたら寝ても覚めても、この問題で汚染され切って腐り果て、病気に例えれば重症患者のようなのだ。手がつけられない。

※　　※　　※

朝夕の散歩以外、普段はほとんど外出して歩くことのないせいか、遠出すると脚力が萎えてだるくなり、老化の二文字が頭をよぎる。シバに引っ張られながら歩く。体力だけでなく注意力も散漫としていることに気づかされたのは、この二、三日前、一人で下見をかねて久渡寺山に出かけたのだが、路面に転がっていたカタツムリの殻を踏みつけたときだった。グシャッと音がした。中身が入っていないのは天敵に食べられたからだろう。私は中身が入っていなかったことに内心ホッとした半面、前方を見ていたはずなのにカタツムリに気づかなかった自分を咎めた。シバがいたら、きっと匂いを嗅いだはずだから見落とすこともなかったと思われる。

久渡寺山に登るには通常、二つのコースがある。麓にある久渡寺の境内から続くコースと、もう一つは久渡寺へ行く途中、白蛇神社のある集落で二股に分かれる土淵川の右股に沿ったコースである。この二股から左股の流れに沿った登り坂の車道を進むと久渡寺で、たいていは久渡寺まで車やバスを利用し、そこから歩き出す。

私とシバは家から土淵川沿いに歩き出し、二股から右股に続くコースをたどった。このコースは上流で二手に分かれ、沢沿いに左手に進むコースは久渡寺からのコースと合流する。右手のコースをたどると尾根に出て、岩落山を経由して久渡寺山頂に至る。尾根には若いブナの二次林が生えていて岩落山の山頂付近がもっとも整然として景観的にすぐれている。ブナ林には母樹が見られ、中にはクマの爪痕が残っているのもある。春先、ブナの花芽を食べるのに登ったのだろう。

尾根道にクマの糞があった。シバも気配を嗅ぎ取っているらしく、しきりに鼻を利かせて警戒しながら道を外れて木立の中へ行こうとする。クマの糞にはヤマブドウのタネが混じっていた。クマと出くわしたらクマは逃げていくだろうから怖いことはないのだが、万が一、何かの拍子に襲いかかって来ないともかぎらない。そのときのためにナタは必携品である。切れ味を鋭くするためピカピカに研いできた。

実際、この数日後、私の知人が岩落山でクマの親子連れに遭遇している。知人の話によれば、前方10㍍ほどのところに、道を塞ぐようにして黒い塊がいたので、なんだろうと思って目を凝らして見ると、動き出してこちらを「睨んだ」というのである。はたしてクマがあの小さな目で睨むかどうかはともかく、知人にしてみれば、はじめて目にする野生のクマだった。

岩落山のブナ林にて

「山でクマに出会うなんて幸運ですね。滅多にないことですよ。羨ましい、ラッキーッ」

私がそう言うと、知人は興奮がにわかに蘇ったようで生き生きとした表情になり、口の両端に白く泡を溜めて語りはじめた。クマに睨みつけられて思わず、体がこばってしまい、気が動転するばかりで「どすべ、どすべ」と、どうしていいかわからなくなったという。心身ともに硬直したまま怯えていると、クマは知人など眼中にないかのように悠然と道を横切ってヤブに姿を消した。そして、それを追いかけるように仔グマが一頭チョコチョコ小走りに続いて行った。

知人はこの話をいままで誰にも打ち明けたことがなかったそうだ。他人に打ち明けると、妙に心配して、そんな危険なところへは行かないほうがいいと要らぬお節介をされかねない。かといって、いつまでも心に留めておくこともできないでいたらしい。

私はシバと散歩中に知人と出会い、立ち話でこの話を聞かされたのだが、知人は話し終わったあと「喉のつっかえが取れたようで、ああ、さっぱりした」と悩み事から開放されたようだった。

「とうさんサ喋れば、危ネことすて、やめろって叱られるのは目サ見えでるし、誰サモ喋られなくてクシャクシャしてらのサ」

この知人は同じ町内の御婦人で、かつて私がNHK弘前文化センターで登山教室の講師をしていたときの受講生の一人である。二十年以上も前のことだが、登山教室の開講はNHK文化センターでは全国に先駆けて弘前が最初とのことで、私がその初代講師である。ウソかホントか、真偽のほどは不確かだが、すでに鬼籍に入られた壽惠村元文支社長がそのように話していた。しかし私は、ネパールへ出かけるなど地元にいないことも多く、長期で休講にするわけにもいかないので一年間だけで辞任させてもらった。

※　※　※

私とシバは岩落山で休憩した。

葉が枯れ落ちて透けた冬枯れのブナ・コナラ林の向こうに見える弘前の市街地に、初冬の淡い陽射しが雲間から斑に射していた。深閑とした冬木立の山肌に敷き詰められた枯葉を渡る風音がときおりかすかに響く。木立の上には、透徹した冷たい青空に、陽を受けて上層面を白く輝かせ、下層面を鼠色に翳らせたむら雲が浮遊し、全体として、山々の風景は生気を失ったようであり冬の到来を予感させた。

私たちは人気のない、冬枯れたブナ木立の道を、往路とはべつの方向へ引き返した。それは二月に来たとき、雪面から跳ね返った枝で顔面をしたたか打ちつけられた急斜面のコースである。竹箒を手に登ってくる人がいたので、その妙ないでたちを怪訝に思って見ると管理人の笹野和志君だった。笹野君は麓にある「子どもの森ビジターセンター」の職員である。私が1982年に、白神山地のブナ林伐採を目的にした青秋林道の建設に反対を表明し、「白神山地の自然を守る会」を立ち上げたことがあるが、そのとき笹野君と、いまは久渡寺の住職の奥様である郁代さんの二人が事務局を引き受けてくれたのだ。

早いもので、あれから30年ちかい歳月が経った。人生何十年かは知らないけれど30年といえば人生に占める割合は時間的にも大きく、ずいぶん昔のことのような気がする。要するに、私たちは旧知の仲間なのである。

笹野君は「子どもの森」の広場で枯れ葉をかき集めているうちに、あまりにもすっきりしたいい天気なので、ついつい上まで登ってきてしまったと話していた。しばらく立ち話をしてから私たちは分かれた。

林道に出て下っているとサルの啼き声がして、シバがさかんに吠え立てる。林道わきの、林立するカラマツの樹の陰から、サルが顔だけ出してこちらを窺っていた。シバは勢いをつけて駆け寄ろうとするのだが、そのたびに首輪に締め付けられ、苦しそうにゼーゼー喉を鳴らしている。

私はシバのリードを引っ張ってカラマツの林を抜け出た。視界が忽然と開け、収穫あとのリンゴ畑を手前に配し、遠くに八甲田の連なりが見えた。リンゴ畑に囲まれた人家のある付近で、後ろ

昼食時に路面に写った影。

手に腰をかがめて歩いていた婆さんに出会った。

「やぁ、こんにちは。いい天気ですな」

婆さんは「山サ登って来たのガ」と聞いた。

「うんだ、天気よくてエガった」と答えると「大鰐のクマ撃ち、来て、喋ってら。親子グマいたド」「ああ、クソがあったよ。ヤマブドウ食ってら」

婆さんは18歳で嫁に来た。現在は80歳、五歳年長の夫と二人暮し。三人の娘は三人とも家にはいない。孫が五人で男が一人、女が四人。孫を連れて、娘たちが里帰りするのを愉しみにしている。今年もお盆の墓参りに来たという。

「まみしくてなによりだ」(「まみし」は健康であること)

そう言って私とシバは、婆さんと別れてから土淵川沿いのサイクリングロードを下り、途中にあるベンチで、黄金色の穏やかな陽射しを浴びながら遅い昼食をとった。私とシバの影が路面にくっきりと映し出されていた。

※　※　※

数年前、府中市役所で副市長をしている、私の大学時代の山岳部の先輩を市役所にたずねたとき、用件を済ませてから弘前市役所の犬猫看板について話題にしたことがある。先輩は話を聞いて言下に一蹴した。

「バカ、お前のとこ、それ遅れてるよ。話になんねぇ」

私も同感である。まったくその通りだと思う。

先輩は1981年に私も隊員で参加した、大学創立１００周年記念事業の一環として実施されたエベレスト西稜登山隊の隊長だ。その後、ヒマラヤをフィールドにネパールを行き来していた私に、エベレスト登山のときのサーダー（シェルパ頭）に土産品を持っていってもらいたいというので、私が受け取りに行ったのだ。

先輩が私に粗野な物言いをしたのは、私が山岳部という仲間内の後輩だからである。現役時代、上級生には会話の端々に「バカ」を多用するクセがあった。何かと言えば、「バカ」が口から出るのだ。「バカ、ふざけんじゃねぇ」「バーロー、バカ」「バカ言うんじゃない。バーロー」といくらでもすらすら思い出すことができる。こういう使い方もあった。「人間、バカになることが大切なんだ。バカになって徹底的にやり通すんだ。いいか」私も上級生になってさんざんバカを口にした。

山岳部は体育会に所属している。いまはそんなこともないだろうけれど、結構な厳しい上下関係があり、規律を重んじていたのだった。といって下級生の意見を無視するようなことはなく、説明するときは懇切丁寧に下級生を納得させる。そうでなければ上級生としてメンツが立たないのである。

府中市役所の副市長の発言のキーワードは「遅れている」「話にならない」である。何が遅れて、何が話にならないのか、私は聞かなかったけれど、もし仮に聞いたとしたら返ってくる言葉は想像がつく。「バカ、お前、社会人になってそんなこともわからないのか。バーロー」だから私は聞かなかった。これが現役時代に下級生から発せられた質問だとしたらそうはいかない。上級生としては、なんとしても答えなければならない。答えられなければ調べて後日答える。もし適切な回答を怠ったり、その場逃れのいい加減な答えを出したことがOBに知れたら検討会でどやされてこっぴどい目に遭う。

そういうことからして前稿で掲げた、弘前市役所の市長や部長の回答などは、問題の本質を全然理解していないという点で話にならない。山岳部だったらどやされるのがオチである。というより、弘前市役所の関係者各位の態度はネチネチして厭らしく、私がどやしつけてやりたいような衝動に駆られる。

※　※　※

二つの事例を掲げよう。

十九世紀から二十世紀にかけて、西欧列強がアジアの国々を植民地化していた時代があった。たとえばイギリスが東インド会社を設立し、インドを支配していたころ、カルカッタ州政庁は夏の間、酷暑を避けて、ヒマラヤが見渡せる高原の街ダージリンに移っていた。ダージリンはそれがきっかけで紅茶の産地、そして避暑地として繁栄するわけだが、当時、ダージリンの中心地チャウラスター広場ではチベット人やシェルパ、レプチャなど現地の人たちの立ち入りが禁じられていた。広場にはベンチが並べられ、そこはイギリス人がヒマラヤの氷雪嶺を展望する憩いの場所として、現地の人たちを排除していたのだった。しかし、街の目抜き通りが広場で交差している、ということは、道路を通って向こう側の道路へ行くことを現地の人たちは禁じられていたことになる。広場とはいっても本来、そこは道路でもあるのだが、それなのにイギリス人以外は通行まかりならん、というわけなのである。

もう一つの事例は、わが国でもよく知られているのだが、場所は中国の上海にあったイギリス租界。現在の黄浦公園である。「犬と中国人は入るべからず」の看板が立てられてあった、ということだが、これは通説で実際には「犬と自転車」「外国人の従僕以外の中国人」ということらしい。しかし、中国人にとっては許されざる屈辱であったに違いない。植民地支配下とはいえ、これが差別主義に根ざした抑圧政策であることに誰しも異存はないだろう。

私がなにを言わんとしているのか、読者には察しがつくと思う。私は正義を振りかざしているのではありません。自分が差別されたり抑圧されたりするのと同じように、他人を差別したり抑圧することを嫌悪し、許されないことだと思っているのである。こうした私の心情は長年、山や川の自然から培った自由の精神に起因するものと思われる。

それにしても前世紀の、西欧列強による植民地支配下のアジアの国々で通行禁止や入園禁止などという差別・抑圧政策がとられていたことと、近代民主主義を標榜する二十一世紀のわが国の弘

前市が税金を使って立看板を設置し、法的根拠があるわけでもないのに市民に通行禁止を強制していると、内容的には寸分違わないのではないだろうか。しかも市内の３００箇所に設置しているのだから、私の良識からすれば異常であり暴挙であり蛮行としか言いようがない。植民地時代の宗主国ばりの市政を敷いて恬として恥じないどころか、自分たちの思考様式が間違ってはいないのだとヘンな自信を持って高飛車に出るのだから、もしかしたら歴史認識が足りないのかもしれない。それに加えて、彼らの精神構造を無性に知りたくなってくる。

私は自分の見解や意見を押し通すつもりは毛頭ないけれど、発言する権利は憲法で保障されているのであり、認めて欲しいとは思っている。しかし、これまでの市役所とのやりとりを見ればわかる通り一顧だにされていないばかりか、これぞまさしく「糠に釘」「豆腐にかすがい」「馬耳東風」「沼に杭」「のれんに腕押し」そのもの、しかも町の一杯飲み屋あたりで根も葉もない噂のタネにされているのである。「なんだば、ネンブカず、やづ。なんさでも文句つけで、あのゴンボホリ」「あいだっきゃーッ、酒乱だつっきゃーッ」それがまた小さな田舎町ゆえ、私の耳に届いてくるのである。私の見るところ、これはある種の村八分現象であり、たぶんに大人気ない。

※　　※　　※

繰り返し述べてきたことだが、私は犬猫看板の文言を改正することを念願している。ところが市長や部長は、公式の回答書や会議録に見られるように「一部のマナーの悪い飼い主による糞や尿の苦情が現実にあるため、文言の改正は考えておりません」、「その周辺地域住民からは絶対ノーだというようなお話も承っておりますので、これはやはり慎重な形で進める必要があると思いますが、」「公園の管理上、支障があると認められる行為の一つとして、犬や猫の入園を禁止しているところであります。

その理由としては、利用者の中心である子供たちへの威嚇やふん尿の未処理による衛生上の問題などにより、過去に多くの苦情が寄せられたことが大きな要因であり、公園の清潔さと安全性を確保することを目的に禁止しております」

私としては「いい加減な屁理屈をこねるんじゃねぇ。バーロー」とどやしたくもなってくる。看板設置の根拠をめぐって、私と市役所の担当者とでは捉え方や意味がまったく異なることが理解されるだろう。私の見解からすれば、市長や市役所の担当者は差別する側に立場を置いていることは明らかである。もしかしたら公権力の濫用ではないだろうか。

なぜ、こうしたことになるのか、それはつまり「遅れている」「話にならない」からなのだが客観的にみると、そのことによって住民の支持が得られるというグロテスクな社会風土が背景にある。先に私が「同じ穴の狢」と言ったのはこのことをさす。もし、住みよい地域社会を実現させようとするならば志を掲げて啓発啓蒙しなければならないはずである。

先に触れた府中市役所の副市長はこうも言っていた。「バカヤロー、そんなことをしたら市民が黙っちゃいねぇよ。ここはお前んとこと違うんだ。公園を歩かないで、どこを犬連れて歩くんだよ。道路歩いたら危なくてしょうがねぇだろ。バカなことを言うな」

犬猫看板の文言に私が差別や抑圧を感じ取って、そのことを指摘しているのに市役所側では縷々述べてきたようにマナーの問題として捉えている。これに対して私は、本質のすり替え、はき違い、混同ではないかと再三再四に亘って指摘しているのである。

そこで、かりにマナーの問題だとしても不可解な点がつきまとう。それは糞を片づけてマナーを守っている飼主に対して嫌疑をかけている、ということになる。だとしたら、これは法治国家としての法の精神からして「疑わしきは罰せず」に逆行するものではないのだろうか。もとより、この方面には門外漢なので、法曹界の関係者に確認しなければならないと思っている。しかし、明らかに不公平な措置である。しかも市民の税金を使ってである。それでいながら口では「市民主権」「対話と創造」などと市長は公言している。これは矛盾ではないのだろうか、詭弁・詐術の類ではないのか、と私としては警戒心を抱かずにはいられない。

じつのところ私の意見や見解に対して、まともな反論なりを述べてほしいところである。市長と部長と課長、つまり犬猫看板設置の責任者、それに対する私との公開討論会でも開催したら実り多いものになるのではないだろうか。市議会の会議録にも見られるように市長は「説明責任」があるのなら、それを果たしてもらいたいし、ボトムアップを図って民意を反映させるべきである。

しかし現実はいまのところ「糠に釘」で何を言っても水掛け論、合意は見出せそうにない。本来なら異なる意見を統合し、合意形成を図るのが望ましいけれど、その道が閉ざされていることは、これまで述べてきた経緯からも理解されるだろう。

こう見てくると解決のすべは道理ではなく権威や力関係にあるようだ。この点、政治力や経済力の伴わない私などは、とても太刀打ちできるものではない。虫けらも同然である。かといって、尻尾を巻いてすごすご退散するというわけにもいかない。

なぜかというと、これまで述べてきた犬猫看板やゴルフの打球の問題は、総じて言えば、人権にかかわる問題だからある。市長や部長や課長のさじ加減一つで決めつけられるような問題ではないのである。なぜ、そのことを理解しようとしないのだろうか。人間としての資質や見識に欠けるのだろうか。それとも、私の理解の仕方が間違っているのだろうか。

この稿の最後に残念な事実を紹介しよう。犬猫看板を設置した金沢隆、それを維持した相馬錩一、そして看板を増設した葛西憲之の三市長に選挙で私も期待の一票を投じているのである。この間四半世紀、ゴルフの打球はネットを飛び越え続けて複数の人たちにボコンボコン当たっているのだが、被害者は押し黙っている。